

(寄稿)

NOMURA

医療ツーリズムと医療の国際化 この10年の変遷から今後を占う

2009年12月、民主党政権時代に医療に産業的視点を加え、医療と観光を連携させた医療ツーリズムは、サービス産業の一つとして、政府の新成長戦略に盛り込まれ、政権が代わった現在でも国家戦略の一つとなっている。

その後、3.11の震災により一時的に冷え込んだものの、安倍政権における日本再興戦略の中で、ヘルスケア戦略として医療の海外への輸出(アウトバウンド)が重視されるようになり、この流れを受けて、一般社団法人 Medical Excellence JAPAN(MEJ)が設立された。同社団法人は、医療機器と医療サービスをセットで輸出し、出遅れている日本の医療機器の海外進出を挽回しようとする狙いもあるという。この取り組みは一定の成果が見られ、日本の医療機関のアジア進出などの事例も見られるようになった。

アウトバウンドが少しずつ進む一方、世界の人口は増加の一途を辿り、それに伴い医療ニーズはとどまるところを知らない。2009年の新成長戦略に盛り込まれた医療と観光を取り込んだ医療ツーリズム(インバウンド)も確実に増加している。日本で暮らす外国人や、観光やビジネスで日本を訪れる外国人も増加しており、これに伴い日本の医療機関を受診する外国人も増加していることが、その要因の一つである。

2018年の厚生労働省の調査によると、アンケートに答えた全国の約50%の医療機関2,174の病院から外国人患者の受け入れがあったと回答を得ている。このことは、これまで、医療マーケットは日本人を中心に捉えられてきたが、在留外国人の増加によって医療マーケットそのものが変化したという証左といえるのではないだろうか。そして、マーケットの変化への対応に遅れをとっている医療機関も多いというのが日本における医療の現状かもしれない。

本稿は、中央大学大学院 戦略経営研究科 教授で多摩大学大学院 特任教授でもある真野俊樹先生に寄稿いただき、医療ツーリズムの国際化について、解説いただいた。真野先生には、2010年2月発行のヘルスケアノートに「日本におけるメディカルツーリズムやヘルスツーリズムの可能性」のタイトルで寄稿いただいている。本稿においては、前回から10年間の変遷を振り返りながら、今後の医療ツーリズムや医療の国際化に向けての課題について示唆いただいた。

本稿の中で、これまでの医療ツーリズムという現象からグローバル化に伴うマーケット環境の変化にも触れつつ、この10年間の総括と医療の国際化がなぜ日本であまり進展しないのか等についても解説いただいた。今後、日本における医療の国際化の在り方について、医療機関の皆様が改めて考える良い機会となれば幸いである。

(市川)

2020年4月20日

Healthcare note

(No. 20-04)

寄稿者名：
中央大学大学院
戦略経営研究科 教授
多摩大学大学院 特任教授
真野 俊樹

編集主幹：
野村ヘルスケア・
サポート&アドバイザー
市川 剛志

野村證券株式会社
金融公共公益法人部